

相互に敬愛せよ

学校長 太田 清史

本校が大正十二年に「大谷中学校」として新発足した際、第九代谷内正順校長により制定された四つの校訓の第三が、「相互に敬愛せよ」です。

人間が万物の霊長だといわれるのは、単なるホモサピエンスとしての「人」だからではなく、自分と他人との区別を知った上で、人と人との間で生きる「関係存在」であるからです。「人」という文字は、人間同士が支え合っている様を象徴しているという見方もあります。

関係存在である人間にとって、一番大きな悲惨事は、言うまでもなくその関係を断ち切れ、孤独に貶められることです。太宰治は、この状態を「人間失格」と呼んだのだと思います。孤独の「孤」の字は、「母を亡くした子ども」を意味するといえます。自分の居場所を失くした人間は、基本的な自信を持つことができず、非常に不安定な心模様を生きなければなりません。

本来、他者との関係において、初めて「人間」となった我々にとって、その関係を断ち切られるということは、人間性の喪失を意味します。

初代校長清澤満之門下の三羽鳥の一人で、晩年、東本願寺の宗務総長をつとめ「盲目の念仏総長」と言われた暁烏敏師は、「われわれは物があってもなくても、一番の悲惨事は一人であるということ

ある。一人は誰がつくっておるか。自分の心でつくっておるのです。家に何十人という人を使うとおって、信じる人があるかという一人も持たぬ人がある。それが本当の孤独です。ただ騒がしいだけです。一人も心が融けておらんというのが、人間世界の悩みである」

（『魂 萌ゆ』）と指摘しておられます。

人間として生きるということは、「共に生きる」ということが大前提なのです。なぜなら我々は、本来一つである同じ命を、分かち合っていて生きているからです。人間だけではなく、あらゆる生命体とも我々は繋がっているのです。「バラバラでいっしょ」なのです。

ですから、他人を非難するということとは、同時に自分を蔑んでいることとなります。清澤満之先生は「他を咎むる勿れ。他を咎めんとする心を咎めよ」（「有限無限

録」と仰いました。

「生きていく」ことを自覚できる人間に生まれた以上、相互敬愛は我々の果たすべき義務なのです。

大谷で学ぶということは、「和顔愛語（柔和な笑顔で愛しみのある言葉掛けをする）」（『大無量寿経』）の生活が実現するということです。校歌の二番には、「互いに敬い愛しみ」という表現で、この校訓が盛り込まれています。